Column

「調査の達人」

ルイス・ワース

松　本　　康（立教大学社会学部教授）

L. ワース（1897-1952）は，ドイツのラインラント地方の農村でユダヤ系商人の子として生まれた。1911 年，叔父に連れられて渡米，ネブラスカ州のオマハで青春時代を過ごしたのち，シカゴ大学の医学部進学課程に入学した。当時，シカゴ大学では R. E. パークが着任し，E. W. バージェスとともに，シカゴ社会学を全盛期に導きつつあった。ワースは学部時代に，パーク，バージェス，W. I. トマス，A. W. スモールの影響を受け，やがて社会学の大学院に入り，1926 年に『ゲットー』で博士学位を取得した。

ゲットーとは，ユダヤ人居住地のことである。ワースの『ゲットー』（1928）は，ゲットーの「自然史」を扱ったもので，中世ヨーロッパでのゲットーの起源に始まり，アメリカにおけるユダヤ人の入植，そしてシカゴにおけるゲットーの歴史へと進む壮大な大河ドラマである。最終的には，シカゴの「ゲットー」から，「ドイチュラント」の異名をもつローンデール地区に脱出するユダヤ人の体験が綴られている。

この時期はまだ，今日のように「社会調査法」が確立していなかった。シカゴの学生たちは，ほとんどあらゆる方法を使ってデータを集めた。『ゲットー』も例外ではなく，歴史の部分は歴史書に頼っているものの，シカゴのゲットーの話になると，セツルメントハウスであるハル・ハウスの論文集，ユダヤ系の団体の文書や新聞記事，そしておそらくワースがインタビュー調査をして書きためたと思われる報告書などが，引用されている。ワースは，こうした資料を使いながら，ゲットーが消滅する傾向にあることを太い線で描く一方で，ゲットーから逃れようとして逃れきれずに，そこに舞い戻るユダヤ人の動きにも注意を払い，なぜゲットーが残存しているのかを分析している。

ワースは，1931 年に助教授としてシカゴ大学社会学科に着任し，40 年には教授となった。その間に「生活様式としてのアーバニズム」（1938）を発表，その内容は，都市の規模・密度・社会的異質性が，個人の原子化した大衆社会状況を生み出すというもので，その後の都市社会学研究のたたき台となった。

ワースは調査の達人というよりも，経験的事象を理論的に整理する達人であった。1951 年にシカゴで繰り広げられた論争において，H. ブルーマーは理論的な意味での方法論的批判に強みを発揮し，E. ヒューズはフィールドワークの伝統を引き継いでいた。ワースは両者の中間にあって，調査から理論を生み出すことをシカゴ社会学の特徴であると強調した。

それだけにワースの理論は，経験的研究によって批判を受けやすかった。W. F. ホワイトは『ストリート・コーナー・ソサエティ』（1943）で，スラムは解体地域ではないと主張して，ワースを激怒させた。ワースはゲットーが高度に組織化された共同体であることを熟知していたものの，シカゴ学派の社会解体論に忠実であった。また，H. ガンズ「生活様式としてのアーバニズムとサバーバニズム」（1962）は，階級要因とライフサイクル要因を重視して，ワースの理論を批判した。しかし，ワースの理論は集合的水準と個人の水準を往復するマルチ・レベルのものであり検証方法が追いついていなかった。多くの批判にもかかわらず，ワース理論の本格的な検証は，まだ始まったばかりである。

Column

「調査の達人」

鈴木　広

――コミュニティ研究にみる綜合社会学の精神――

金子　勇（北海道大学大学院文学研究科特任教授）

学部2年生のときに「社会的移動論」のテーマで，鈴木広先生の講義と演習を受けてから44年経過した。大学院では5年間，コミュニティ研究論文の購読と都市コミュニティ調査のご指導を受けた。先生はもちろん「調査の達人」であるが，それを背後で支えたのは恩師・新明正道が主唱した綜合社会学への配慮であった。

その原則は，①研究対象のトータルな把握，②ミクロ分析をも統合する能力，③客体としての社会と社会の主体性を考察する，④現代日本の社会変動についてAGIL図式を考え，経済・政治・社会統合・人間の社会化の領域での変化を確認する，⑤それぞれの領域間の関係における変化を分析する，などにまとめられる（鈴木広編，1975，『現代社会の人間的状況』アカデミア出版会）。院生当時は，④や⑤と実証的な都市コミュニティ研究の結びつきが理解できずに，大いに悩んだ。

数年前に喜寿の会を開かせていただいた際に小冊子を作り，その前書きに先生の専門分野は，①都市化とコミュニティ，②社会移動と階層・階級，③宗教と社会階層，④アクション・リサーチと社会計画，⑤環境社会学と災害研究，⑥地域福祉と家族福祉，⑦過疎社会と炭住社会，と書かせていただいた。これらの調査研究をとおして綜合化されたいくつもの主題は，丹念な質的・量的社会調査によって収集されたデータの分析が基盤となった高水準の実証的研究であり，1980年の日本都市学会・奥井記念賞と99年の日本都市社会学会・磯村記念賞の受賞はその証明である。

そして⑧その他には，マンハイム，ミルズ，リプセットとベンディックス，ハンターらの著作の翻訳がある。学説研究と翻訳と実証研究の融合は先生なりに工夫された綜合社会学であり，当時も今も都市社会学の領域だけに収められるような業績ではない。

このような自らの研究の傍ら，先生は「院生指導の名人」でもあった。実に50名近くが社会学の専門家として先生のもとから巣立っている。無口ではあるが，話をしっかり聞いていただき，肝心なところで正確なコメントを頂戴した。また，ご自身で理論研究と実証分析を体現された。

そして，調査結果を一方では学術的な現状分析としてまとめられ，他方では新聞を軸としてジャーナリスティックな解説を示された。さらに，専門雑誌論文と調査報告書のまとめを同時並行的になさった時期があり，双方を行う意義を学んだ。

まとめると，先生の綜合社会学の実践は，テーマの綜合と分析法の綜合に大別される。前者はいくつもの日本都市で既述した7つの社会学的主題を研究することにつながり，後者では質的調査と量的調査のバランスがとれていたことを意味する。

その過程で日本社会学界の共有財産となった「コミュニティ・モラールとノルム」「絶えず全体化する全体性，絶えず私化（わたくしか）する私性（わたくしせい）」「ボランティア活動のK（C）パターン」などの概念が誕生した。「コミュニティ・モラール」誕生秘話は金子ほか『社会学の学び方・活かし方』（勁草書房，2011）で紹介した。これは直方調査から生み出され，「私化」は日本社会の現状分析から，「K（C）パターン」は福岡県民調査から発見され，いずれも「調査の達人」により切り開かれた新しい概念群といってよい。

どの作品にも，綜合社会学の精神とコミュニティの研究の融合があり，全体社会と個人の接点も浮かび，「調査の達人」による実証的な理論社会学の到達点を味わうことができる。